

## 待降節第2主日礼拝説教「声を聞いていますか？」

日本基督教団石神井教会 2019年12月8日

### 【使徒書日課】ペトロの手紙二 1章19節～2章3節

1<sup>19</sup>こうして、わたしたちには、預言の言葉はいつそう確かなものとなっています。夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として、どうかこの預言の言葉に留意してください。<sup>20</sup>何よりもまず心得てほしいのは、聖書の預言は何一つ、自分勝手に解釈すべきではないということです。<sup>21</sup>なぜなら、預言は、決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖霊に導かれて神からの言葉を語ったものだからです。

<sup>22</sup>かつて、民の中に偽預言者がいました。同じように、あなたがたの中にも偽教師が現れるにちがいません。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを贖ってくださった主を拒否しました。自分の身に速やかな滅びを招いており、<sup>23</sup>しかも、多くの人が彼らのみだらな楽しみを見倣っています。彼らのために真理の道はそしられるのです。<sup>24</sup>彼らは欲が深く、うそ偽りであなたがたを食い物にします。このような者たちに対する裁きは、昔から怠りなくなされてきて、彼らの滅びも滞ることはありません。

### 【福音書日課】ヨハネによる福音書 5章36～47節

<sup>36</sup>しかし、わたしにはヨハネの証しにまさる証しがある。父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業、つまり、わたしが行っている業そのものが、父がわたしをお遣わしになったことを証ししている。<sup>37</sup>また、わたしをお遣わしになった父が、わたしについて証しをしてくださる。あなたたちは、まだ父のお声を聞いたこともなければ、お姿を見たこともない。<sup>38</sup>また、あなたたちは、自分の内に父のお言葉をとどめていない。父がお遣わしになった者を、あなたたちは信じないからである。<sup>39</sup>あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。<sup>40</sup>それなのに、あなたたちは、命を得るためにわたしのところへ来ようとしない。

<sup>41</sup>わたしは、人からの誉れは受けない。<sup>42</sup>しかし、あなたたちの内には神への愛がないことを、わたしは知っている。<sup>43</sup>わたしは父の名によって来たのに、あなたたちはわたしを受け入れない。もし、ほかの人が自分の名によって来れば、あなたたちは受け入れる。<sup>44</sup>互いに相手からの誉れは受けるのに、唯一の神からの誉れは求めようとしないあなたたちには、どうして信じることができようか。<sup>45</sup>わたしが父にあなたたちを訴えるなどと、考えてはならない。あなたたちを訴えるのは、あなたたちが頼りにしているモーセなのだ。<sup>46</sup>あなたたちは、モーセを信じたのであれば、わたしをも信じたはずだ。モーセは、わたしについて書いているからである。<sup>47</sup>しかし、モーセの書いたことを信じないのであれば、どうしてわたしが語ることを信じることができようか。」

## 暗いところに輝くともし火

アドヴェント・キャンドルの二本目が灯りました。聖壇に設けているアドヴェント用のロウソク台は、三年前から用いているもので、四本の細いロウソクを立てる腕に囲まれて中央には一本の太いロウソクが立てられるように作られています。「待降節」の四週間を示す四本のロウソクと、「降誕」を迎えたときに灯されキリストを示す一本のロウソク、合わせて五本のロウソクを灯すようにされています。また、「待降節」中に灯す四本のロウソクのうち三本は紫色、一本は桃色のものが、五本目のキリストのロウソクは白色のものが、用意されました。今年も、キリストを指し示す五本目の白色のロウソクについても、「降誕のキャンドル」の名称で売られている専用のもを入手して用いることにいたしました。いずれにしても、どのロウソクも専門店で購入できる専用のもです。

アドヴェント・キャンドルを灯す習慣は、それほど古いものではないようです。もともとは、百年ほど前から、アドヴェント・カレンダーなどと同じように、子どもたちに待降節を覚えさせ、クリスマスに備えさせるために用いられるようになったもので、礼拝で用いるというよりは、各家庭で用いられて広まったものです。それが、この何十年かの間に礼拝堂に持ち込まれるようになり、礼拝で用いるにふさわしいものへと改良されてきて、現在のような形式のものになりました。

とは言え、元来は各家庭で待降節を過ごすために用いられてきたのです。待降節の間、自由にデザインされた四本のロウソクを飾って各家庭の食卓に用意し、食事や来客の際に灯すという習慣が、ドイツなどでは今でも一般的なようです。皆さんの中にそのような習慣を実践されている方は少ないかもしれませんが、前任地の付属幼稚園では、待降節を迎える前に園児が各自、キャンドル台を工作して持ち帰り、各家庭で灯して過ごすように教えていました。もともとの成り立ちからすると順序が逆ですが、わたしたちの礼拝で実践されていることを、それぞれの家庭でも実践するということが、わたしたちの信仰が生活の中に根差すようになるためにも、大切にしたいことかもしれません。

考えてみると、不思議なことです。このようなアドヴェント・キャンドルを灯す習慣は、ロウソクが照明器具としての役割を求められなくなってから広まったのです。もちろん、礼拝のために用いるロウソクは、古くから決まったものがありました。聖卓に一对のロウソクを灯して「キリストの神性と人性」を表すとか、三燭のロウソクを灯して「三位一体の神」を表すという礼拝における実践は、私たちの教会は受け継いでいませんが、古来、今に至るまで広く行われていることです。それとは別に、礼拝だけでなく家庭でも実践されるアドヴェント・キャンドルの習慣は、現代的なものです。現代の生活の中でこそ、意味のあるものとして広く実践されてきているのです。

それは、明かりのためではなく、暗闇のための灯だと言っても良いのかもしれませんが、暗闇を思い起こすための灯です。あえて、小さな灯をともすことによって、「暗闇の中に輝く光」に思いを致すのです。

## 神からの言葉

使徒書日課（Ⅱペトロ 1～2 章）で、使徒ペトロは、「預言の言葉」を指して、「**暗い所に輝くともし火**」だと言っています。夜が明け、明けの明星が…昇るときまで、そのようなともし火が必要なのだと、教えているのです。ペトロは、詩編の言葉、「**あなたの御言葉は、わたしの道の光、わたしの歩みを照らす灯**」（詩 119:105）を思い起こしていたかもしれません。聖書の御言葉がわたしたちの人生の道を照らし出す光であるという理解は、旧約聖書以来のものです。

信者に限らず、聖書の御言葉に日々励まされ、生き方を指し示してくれるものとして御言葉を「日毎の糧」にされている方は、少なくないでしょう。聖書を順に通読することを実践されている方もありますが、「道の光」としてふさわしい聖句を選んで配列された聖句日課表や書籍を用いて御言葉に親しんでいるという方のほうが多いかもしれません。聖句に関連する短いコメントが付いていたりすれば、実用性も高いのです。そのような実践をしているかどうかは、やはり、わたしたちの日々の生活や人生の生き方に現れてきます。実際、「わたしはキリスト信者だ」ということをアピールしていなくても、語る言葉や振る舞い方にそのことがにじみ出ている人に出会うことがあるのです。もっとも、そのことに気づくためには、わたしたち自身が同じような実践を始めていなければいけないかもしれません。

そういうことであるならば、それは何も「聖書」でなくてもよいのではないかと思う方もあるかもしれません。哲学書や「仏陀の教え」でも、同じようなことができるのではないのでしょうか。実際、「良い本」を共有して読み合うということを実践されている方もあるでしょう。キリスト者の中で「聖書」以外の書物が好まれることは、どの時代にもありました。「聖書」は特殊で難解だから専門家（牧師や司祭！）に任せておいて、自分たちは身の丈に合った書物を読めばよい、というのです。

確かに「聖書」は、難解な書物かもしれません。ことに「旧約聖書」には、古代イスラエルの歴史物語が含まれていますから、その血なまぐささや神と人との激しい関係に闇を感じ、嫌気がさすという方もあるようです。けれども、主イエスや使徒たちは、まさにその「旧約聖書」を指して、「これが、わたしたちの道の光、わたしたちの歩みを照らす灯だ」としたのです。主イエスは、「旧約聖書」について「律法の文字が一点一画も消え去ることはない」（マタイ 5:18）とおっしゃられたのです。

それはもしかすると、「旧約聖書」の中で語られることの多くが「闇」であるからこそ、なのではないでしょうか。「聖書」は、決して綺麗ごとや理想論を並べ立てた書物ではないのです。そこには、人間の営む現実の中に広がる「闇」が語られているのです。しかも、神は、その「闇」の中に「光あれ」と「光」をもたらす方として、語られるのです。そのようにして、「闇」の現実の中に「光」をもたらししてくださる方の言葉は、「聖書」の文字そのものというよりは、その背後に立ち現れてくる言葉としてしか、あり得ないのではないのでしょうか。

## 神の声を聞く

わたしたちは、書物を読むとき、著者のことを考えずに読むこともあります。それでも十分に意味のある書物もあるでしょう。けれども、そのような書物は、書かれていることを知識として自分のものにしてしまったら、もうそれ以上読む必要はありません。ところが、書物の中には、わたしたちが何度でも読み返さないではいられないものもあります。「書物」などと大げさに言わなくてもよいかもしれません。「手紙」などでも同じことです。「ビジネスレター」のように、用件が伝われば処分してしまうものもありますが、個人的な「手紙」を処分することはなかなかできません。その書かれている文字の向こうに、書いた人の存在を意識しないではいられないからです。書かれている文字以上に、書いた人の語る言葉を、そこから聞き取らないではいられなくなるのです。直接に個人的な関係がある場合には、自ずとそうなるのですが、そうでなくても、「書物」の背後に存在する人のことを思い巡らさずにいられなくなることがあるものでしょう。著者その人のことだけでなく、著者とその人に関わる周りの人のことにまで広がって、思い巡らさないではいられなくなることあるのです。

「聖書」を、単に倫理的知識を教える教科書として読むこともできるでしょう。一步踏み入って、「聖書」各書の実際の著者を想像し、著者の思想を分析する読み方は、聖書学者が教えてくれます。しかし、使徒ペトロが実践したのは、さらにもう一步踏み入った「聖書」の読み方です。そこに、「神の言葉」を聞き取る、という読み方です。

もちろん、ペトロは、「聖書」の物語の中で神が直接話法で語られていることだけを指して「神の言葉」と言っているわけではありません。そうでないところも含めて、「聖書」各書の著者は「**聖霊に導かれて神からの言葉を語った**」と、ペトロは言っているのです。ペトロが言いたいことは、こういうことではないでしょうか。「聖書」は、著者と神との対話の中から記されたものであるゆえに、そこに神から著者（を通して読者）に語られた言葉を聞き取ることができる。

もっとも、ペトロは、このような理屈をこねてではなく、もっと直接的に主イエスから、そのことを教えられていたのに違いありません。彼は、主イエスが高い山の上で光り輝く姿を示され、天から「これはわたしの愛する子」という声が響いたときのことを述懐しています（Iペト 1:16~18）。それは、主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたときに天から響いたというのと同じ言葉の声です。今日の福音書（ヨハネ 5章）で主イエスは、「父のお声」を聞くことの大切さをお教えです。ペトロは、主イエスが御父である神と語られる姿に接して、神の声の響きを知るようにされたのでしょう。そして、「聖書」を読むときにも、神の声を聞き分けるようになったのでしょう。

そのことを、わたしたちも願って、今、あらためて主イエスをお迎えすることに心を向けています。神の御子として、父と母の声だけを頼りにする幼子として、主イエスはおいでになられました。それは、わたしたちも同じように、御父である神の声を聞き分ける神の子の一人とされるためなのです。